大阪体育大学紀要
第48巻（2017）pp. 119–123

事例報告

競泳競技における健聴者とろう者の心理的競技能力の比較

尾関一将，會田空[1)]，小島毅[2)]

2016年11月30日受付　　2017年1月11日受理

Comparison in psychological competitive ability between normal and deaf swimmers

Kazumasa Ozeki, Sora Aita[1)], Tsuyoshi Kojima[2)]

本研究の目的は，両者の心理的競技能力を比較し，健聴者とろう者の心理的競技能力にどのような違いがあるかを明らかにすることを目的とした．調査対象者は，体育大学水上競技部に所属する競泳選手8名(国民体育大会出場レベル)と日本ろう者水泳協会に所属する強化指定選手8名(国際大会出場レベル)であった．測定方法は，心理的競技能力診断検査(DIPCA.3，中学生～成人用)を用いた．調査対象者はそれぞれ競技場面を想定して心理的競技能力診断検査に回答した．健聴者群，ろう者群の2つに分けて心理的競技能力における5つの因子を比較，検討するために性別ごとに独立2群間のt検定を行った．その結果，男子群においてはすべての因子および下位尺度に有意な差が認められなかったが，女子群においては集中力において有意な差が認められた（ろう者11.0 ± 2.6，健聴者17.0 ± 2.0，$p < 0.05$）．本研究では女子群における集中力以外の因子および下位尺度において有意な差が認められなかったことから，ろう者選手は健聴者選手と比較して聴覚障害によって生じる競技力向上のための情報量の違いによって心理的競技能力に差が生じないことが推測された．

Keywords: Deaf swimmer, national team, Athletes psychological competitive ability
キーワード：ろう者競泳選手，日本代表，心理的競技能力

1. 背景

近年，障害者スポーツが盛んに行われるようになり，その中でも身体障害者（視覚障害を含む）を対象とした競技大会の中においてパラリンピックの知名度は極めて高い．障害者スポーツの中には聴覚障害者のためのデフリンピックや、知的障害者のためのスペシャルオリンピックスなどの大会も行われている．その中でも聴覚障害者を対象とした2013年のデフリンピックにおいて日本チームは21個のメダルを獲得しており，その中でも競泳においては世界新記録を含むメダル8個を獲得しており，少しずつではあるが国内の認知度が高まっている（金持ら2016）．

1）大阪体育大学　体育学部　　2）和歌山県教育庁

聴覚障害を持った選手（以下ろう者選手と呼ぶ）の66%は健聴者のチームを活動拠点としており（中村ら2009），特に競泳競技においてろう者選手は健聴者とともに練習をすることがほとんどである．しかしながら，練習中には補聴器などを使うことができず，健聴者の選手と比べて十分なコミュニケーションを指導者ととることが難しく，仲間や指導者とのコミュニケーションや情報量に不安を感じている選手も多い（金持ら2016，中村ら2009）．このようなコミュニケーションや競技力向上のための情報量の不足は，泳技術や心理的な要因にも影響を与えることが考えられる．しかしながらろう者選手において競技に関する心理的要因について検討された報告はない．そこで本研究の目的は，スポーツ選手が競技場面で実力を発揮するために必要な心理的能力である「心理的競技能力（徳永2001）」に着目し，競泳競技に取り組む健聴者とろう者の心理的競技能力を比較することで，ろう者の心理的競技能力の特徴を明らかにすることを目的とした．

2. 方法

調査対象者は，体育大学水上競技部に所属する競泳選手男子5名，女子3名の計8名(国民体育大会出場レベル)と日本ろう者水泳協会に所属する強化指定選手男子5名，女子3名の計8名(ろう者国際大会出場レベル)であった．測定方法は，心理的競技能力診断検査(DIPCA.3，中学生～成人用)を用い，調査対象者はそれぞれ心理的競技能力診断検査に回答を行った．健聴者群，ろう者群の2群に分けて心理的競技能力における5つの因子(競技意欲，精神の安定・集中，自信，作戦能力，協調性)を比較，検討するために性別ごとに独立2群のt検定を行った．また，5つの因子における下位尺度である，競技意欲(忍耐力，闘争心，自己実現意欲，勝利意欲)，精神の安定・集中(自己コントロール能力，リラックス能力，集中力)，自信(自信，決断力)，作戦能力(予測力，断力)，協調性(協調性)においても比較，検討するために性別ごとに独立2群のt検定を行った．

3. 結果

表1，表2，表3および表4に各因子，各下位尺度の測定結果を示した．男女別に健聴者群とろう者群を比較した結果，男子（n=5）においては5つの因子および12の下位尺度において有意な差が認められなかった（表1，2）．

表1　男子競泳選手における各因子におけるろう者群・健聴者群の比較

因子	男子ろう者(n=5)	男子健聴者(n=5)	p
競技能力	65.4±8.8	62.6±15.2	n.s.
精神の安定・集中	48.4±6.9	48.4±4.7	n.s.
自信	27.8±5.0	27.0±7.2	n.s.
作戦能力	27.2±5.1	24.4±8.2	n.s.
協調性	15.6.±2.2	13.8±4.8	n.s.

表2　男子競泳選手における各下位尺度におけるろう者群・健聴者群の比較

因子	下位尺度	男子ろう者(n=5)	男子健聴者(n=5)	*p*
競技能力	忍耐力	15.6±5.0	15.2±4.5	n.s.
	闘争心	18.4±0.5	17.2±3.9	n.s.
	自己実現意欲	17.0±2.0	16.0±4.5	n.s.
	勝利意欲	14.4±2.7	14.2±3.7	n.s.
精神の安定・集中	自己コントロール能力	18.0±1.0	15.4±2.5	n.s.
	リラックス能力	13.0±5.0	14.8±1.9	n.s.
	集中力	17.8±1.6	18.2±1.3	n.s.
自信	自信	15.2±2.6	13.6±4.3	n.s.
	決断力	12.6±3.7	13.4±3.4	n.s.
作戦能力	予測力	14.2±2.7	11.8±4.5	n.s.
	判断力	13.0±2.5	12.6±3.8	n.s.
協調性	協調性	15.6±2.2	13.8±4.8	n.s.

また，女子（n=3）においては下位尺度のひとつである集中力において有意な差が認められた（ろう者11.0 ± 2.6，健聴者17.0 ± 2.0，$p < 0.05$）（表3，4）.

表3　女子競泳選手における各因子におけるろう者群・健聴者群の比較

因子	女子ろう者(n=3)	女子健聴者(n=3)	*p*
競技能力	59.0±20.7	65.0±6.1	n.s.
精神の安定・集中	31.6±4.0	44.7±6.7	n.s.
自信	20.6±5.5	22.3±4.6	n.s.
作戦能力	18.0±1.7	20.3±3.1	n.s.
協調性	17.6±1.5	13.3±6.4	n.s.

表4　女子競泳選手における各下位尺度におけるろう者群・健聴者群の比較

因子	下位尺度	女子ろう者(n=3)	女子健聴者(n=3)	p
競技能力	忍耐力	13.0±4.0	15.0±3.6	n.s.
	闘争心	15.3±5.7	16.0±2.6	n.s.
	自己実現意欲	15.3±6.4	18.3±0.5	n.s.
	勝利意欲	15.3±5.5	15.6±1.5	n.s.
精神の安定・集中	自己コントロール能力	11.6±0.6	16.0±3.0	n.s.
	リラックス能力	9.0±1.0	11.6±3.2	n.s.
自信	集中力	11.0±2.6	17.0±2.0	$p < 0.05$
	自信	10.0±3.5	12.7±2.3	n.s.
作戦能力	決断力	10.7±3.2	9.7±2.3	n.s.
	予測力	7.7±1.2	10.3±2.0	n.s.
	判断力	10.3±2.5	10.0±3.6	n.s.
協調性	協調性	17.7±1.5	13.3±6.4	n.s.

4. 考察

4.1　男子競泳選手における心理的競技能力の比較

男子競泳選手（n=5）における健聴者群およびろう者群の心理的競技能力の比較においてすべての因子，下位尺度に有意な差が認められなかった．このことから聴覚障害によって生じる競技力向上のための情報量の違いによって心理的競技能力に差が生じないことが推測された．本研究のろう者群は健聴者群と比較して競技レベルは低いにも関わらず心理的競技能力に有意な差が認められなかった．徳永ら（1991）は全国大会などに参加するレベルとしないレベルでは競技意欲，精神の安定・集中，自信および作戦能力の4因子において有意な差が認められたことを報告しており，本研究の結果は先行研究とは異なる結果を示した．

このような結果になった要因として，ろう者の競技レベルが低いのは技術的な要因のみであるということが考えられるが本研究では明らかにすることができない．またろう者群は国際大会であるデフリンピックや世界選手権に出場することや健聴者の日本代表選手と同程度の合宿やサポートを受けられることによって心理的競技能力が高められている可能生が示唆された．

4.2　女子競泳選手における心理的競技能力の比較

女子選手における（n=3）健聴者群およびろう者群の心理的競技能力の比較において下位尺度のひとつである集中力に有意な差が認められた（ろう者11.0 ± 2.6，健聴者17.0 ± 2.0，$p < 0.05$）（表4）．徳永は（2001）競技レベルの違いにおいて特に自信因子及び作戦能力因子に顕著な差が認められたこ

とを報告している．つまり本研究の調査対象者である女子競泳選手においては男子競泳選手とは異なり競技レベルもしくはろう者であることによる影響によって自信の尺度が低いことが考えられ，今後さらなる詳細な検討が必要であると考えられる．

5. 本研究の限界

調査対象者がろう者日本代表選手に対して，健聴者は国民体育大会出場レベルの大学水上競技部員であったため，今後は健聴者の日本代表選手における心理的競技能力との比較を行う必要がある．また，ろう者日本代表選手の人数そのものが少ないために調査対象者が少なく，検定力をあげることが難しいと考えられる．

6. 結論

競泳競技における健聴者選手（国民体育大会出場レベル）とろう者選手（ろう者国際大会出場レベル）において男子選手においては心理的競技能力に違いがないことが推測された．

7. 謝辞

本研究は日本ろう者水泳協会の協力により実施されました．ここに感謝の意を表します．

8. 引用文献

金持義和，藤本淳也，尾関一将（2016）：ろう者の競泳に関する研究―選手の練習環境に着目して―．日本水泳・水中運動学会年次大会論文集:116-117

中村有紀，及川力（2009）：アンケート調査による聴覚障害者トップアスリートの競技環境と意識の実態．日本体育学会大会予稿集 60:293

徳永幹雄（2001）：スポーツ選手に対する心理的競技能力の評価尺度の開発とシステム化．健康科学 23:91-98.

徳永幹雄，金崎良三，多々納秀雄，橋本公雄，高柳茂美（1991)：スポーツ選手に対する心理的競技能力判断検査の開発．デサントスポーツ科学 12 :178-19